

タイトル『フォルモサ!』 作 石原 燃

登場人物 男7人、女3人

百木太郎（ももきたろう）……台湾総督府の嘱託。人類学者。三十代後半。
百木アイ（ももきあい）……百木太郎の妻。三十代半ば。
百木夏夫（ももきなつお）……百木太郎とアイの息子。十五歳。
八ナコ……タイヤル族の女性。百木家の養女。二十代前半。
宮田（みやた）……台湾総督府の測量技師。二十代後半。
森尾（もりお）……東京帝大理科大学人類学教室教授。四十代後半。
鶴丸（つるまる）……台湾総督府理蕃本署調査課課長。四十代後半。
貴子（たかこ）……鶴丸の妻。愛国婦人会台北支部長。四十代前半。
中島（なかしま）……台湾総督府巡查。五十代後半。
ポール高井（たかい）……フランス人。平松同仁社の映画技師。二十代半ば。

第一場 プロローグ

大正十一年。

東京のアイの実家。

着物姿のアイ、古いアルバムや、大学ノートを抱えて入ってくる。
何冊かのそれを、どさっと、机の上に広げる。

埃が立ち、咳込むアイ。

それらを確認するうちに、小さめの手帖が何冊か出て来る。

手帖は、他のアルバムやノートと同様に年が入っている。

アイは、手帖の一冊を手に取り、ぱらぱらと頁をめくる。

アイ（手帖を読む）明治四十四年三月八日。あの人が帝国大学の森尾教授と調査に出てから半年。帰ってくる予定を過ぎて、ひと月が経つ。一度山に入ると調査に没頭してしまうのはいつものこと。いつ総督府から連絡が入るか、すべき事に手が着かぬようではならぬ。ここは麗しの島・フォルモサ。日本が手にした初めての外地。十年前、船上から初めて見たあの雲をも突き抜ける山々を思い出すべし。あの切り立った山々に住まう未開の人々の生活が、あの人にとっては樂園なのだ。あの人がもう帰って来ぬのではないかという不安を抱いてはならぬ。あの人は心配されることを望まぬのだから。……ひとつ、人類学者の妻として、夫の研究を理解するべし。……ふたつ、私

は私自身の生き甲斐を追求して、新しき女となるべし。……みつつ……

窓の外から、子供達が歌う「桃太郎」の歌が聞えてくる。

子供達の声（歌）桃太郎さん、桃太郎さん

お腰に付けたきび団子

ひとつ、私にくださいな

やりましょう、やりましょう

これから鬼の征伐についていくなら

やりましょう

アイ、手帖から目を上げ、外を見る。

溶暗。

第二場 台湾総督府理蕃本署調査課

舞台に明かりが灯る。

そこは、台湾総督府理蕃本署調査課。

建物は木造の飯の庁舎で、

その内装は、格子の入った縦長の三連窓や腰壁など、

明治時代初期の擬洋風建築の造りである。

周囲には、本や資料、標本などが雑多に詰め込まれた棚が並んでいる。

上手側には大きめのテーブル。その周囲には木製の椅子がいくつか。

下手側に応接セット。

応接セットのテーブルも資料でこった返している。

下手に廊下に出る扉。客席からは見えないが、廊下には給仕場がある。

上手に課長室へ繋がる扉。

子供達の声は、いつしか討伐隊が歌う声に変わっている。

討伐隊の声（歌）桃太郎さん、桃太郎さん

お腰に付けたきび団子

ひとつ、私にくださいな

やりましょう、やりましょう

これから鬼の征伐についていくなら

やりましょう

行きましょう　行きましょう
あなたについて何処までも
家来になって行きましょう

そりや進め　そりや進め
一度に攻めて攻めやぶり
つぶしてしまえ　鬼が島

おもしろい　おもしろい
のこらず鬼を攻めふせて
分捕物をえんやらや

明治四十四年三月。春の朝日が差し込んでいる。
宮田が一人、ソファにベッドメイキングをしている。
クツシヨンをソファの端に置き、枕とする。
後ろの棚から、毛布を引っ張り出し、はたと埃が立つ。
咳込んで、窓を開ける宮田。外の空気が流れ込む。

宮田
……

宮田、手ぬぐいで鼻を覆う。
討伐隊の声が大きくなる。

宮田、間近に見る討伐隊に高揚する。
そこに、鶴丸。

扉が開く音に、窓を閉めて、慌てて作業に戻る宮田。
鶴丸、廊下の様子を伺いながら、扉を閉める。

宮田　あ、すみません、すぐに。
鶴丸　（廊下の外を気にして）ああ、うん。
宮田　毛布、こんなものしかないんですが、大丈夫ですか。
鶴丸　うん、いや。
宮田　医務室から借りてきますか？　あ、でも、それならいっそ、医務室にお
連れした方がいいでしょうか。

鶴丸　君に任せる。

宮田　いや、でも……

鶴丸　課長室にいる。でも、いないと言え。

宮田　は？

鶴丸　いないんだ、俺は。

宮田 はい。

鶴丸、課長室に向かう。

宮田 あ、あの、それで毛布はどうしたら？

鶴丸 だから任せると言ってるだろう。

宮田 すみません、東京帝大の先生に失礼があっちゃいけないと思って。

鶴丸 それはいい心がけだ。

宮田 百木さんに連れ回されて、お疲れだろうって伺ったので。

鶴丸 うん、頼んだぞ。

宮田 いや、ちよつと……

そこに、貴子が現れる。

着物に割烹着姿で、愛国婦人会のたすきを掛けている。

貴子 どうして逃げるんですか。

鶴丸 逃げてなんかいない。

貴子 助手を一人出して欲しいってことが、そんなに無理なことですか？

鶴丸 いや、だから。

貴子 わかっていますよ。蕃人の討伐が始まるんですもの、蕃地の行政を担当しているあなたの部署は、猫の手も借りたいくらいなんですしょう。

鶴丸 そりゃ、もうひどいもんだ。

貴子 では伺いますけど、私たち愛国婦人会がなんのために活動写真を撮ると

お思いですか？

鶴丸 それは、だから、興業を打って……

貴子 その売り上げを、討伐に募金するためです。これが平地でシナ人を討伐するって話なら、あなたの部署にお願いしたりしませんよ。

鶴丸 そりゃ、蕃地はうちの管轄だが、討伐自体は軍の管轄で、うちは調査と行政をだな……

貴子 討伐には協力出来ないって言うんですか？

鶴丸 そんなことは言つたらん。討伐は総督の御命令で、総督府の総意だ。

貴子 その通りです。

鶴丸 ……協力はするとしてもだ、大体、なにを撮るんだ。

貴子 知らないんですか？ 今、台北市民がどれだけ討伐に興味を持ってるか。蕃人は首を狩るといふけれど、一体どんな様子で襲ってくるんだろう、それと戦う討伐隊は、ってそんな話で持ちきりですよ。同じ台湾にいたって、私たち市民には山の中がどうなってるかなんて全くわからないんですからね。それを撮らない手はないでしょう。戦意高揚にも繋がって一石二鳥じゃありませんか。

鶴丸 討伐を撮影するのか？
貴子 ええ、実況中継するんです。
鶴丸 蕃地に同行して？
貴子 しないで、どうやって実況中継するんですか。
鶴丸 しかし、お前、蕃地に行くには、何日も山の中歩いて……
貴子 あら、活動写真会社の方は、すっかり乗り気でしたよ。一番若くて体力があるのを行かせますって。
鶴丸 それなら助手もそつちで……
貴子 そんな経費があれば、苦労しませんよ。

二人の後ろで躊躇していた宮田が、鶴丸に近寄る。

宮田 あの……
鶴丸 (宮田に) ちょっと黙ってる。(貴子に) そうは言っても、蕃地に行くとなると……。百木だったら安心だが、あいつが軍隊と隊列組んで歩けるとは思えないし。
貴子 そんな、子供じゃないんですから。
鶴丸 無理無理。行ったことのない蕃社でも通りかかってみる、軍隊撒いてでも調査に行つちまう。まあ、もって三日がいいところだね。
貴子 事前にちゃんと説明しておけば。
鶴丸 今回の調査だって、ひと月前には帰ってる予定が、この有様だ。調査計画は守れて、俺がどれだけ言ったと思う。
貴子 でも他にいないんでしょう？
鶴丸 ……
宮田 あの、お話し中すみませんが……
鶴丸 なんだよ。
宮田 毛布、どうしましょう？
鶴丸 え、ああ……
宮田 駅前からならそろそろお着きになる頃じゃないかって。派出所から連絡あつて、もう三十分ですから。
貴子 そちらの方は？
鶴丸 うちの新人だ。
宮田 あ、はじめまして。宮田です。昨日から理蕃本署調査課でお世話になっていきます。内地から来たばかりで、台北のことは、右も左もわかりませんが、よろしく願います。……あの、愛国婦人会の会長さんですか？
貴子 台北支部の支部長をしております、鶴丸貴子と申します。
宮田 え？
鶴丸 妻だ。
宮田 ああ！ 課長にはお世話になっております。あ、これからお世話になり

ます。

貴子（鶴丸に）この方はどうなんですか？

宮田 え？

鶴丸（宮田をまじまじと見て）ああ……

宮田 え？ え？

鶴丸 うん、いいかもしれないなあ。

貴子 まだお若そうですし、体力もおありでしょう。

宮田 私は無理ですよ、活動写真なんて。なんの知識もありませんし。

貴子 大丈夫ですよ。三脚やフィルムを運んでくれればいって話でしたから。

宮田 いや、そういうことではなくて、その、私は測量技師ですし。

貴子 まあ、それなら、山歩きにも慣れてらっしゃるわね。

宮田 見たこともありません、山なんて。

貴子 それでしたら、訓練しなくちゃ、山歩き。

宮田 いや、でも討伐隊と一緒にいるのはちょっと……あ、私が測量しない

と、調査課が困りますし。

鶴丸 そうでもないんじゃないか。

宮田 え？

鶴丸 討伐以外の時に、必要な測量さえしてくれば。うん、大丈夫だ。

宮田 いやいやいや。

鶴丸 総督府のために頑張ってくれたまえ。

宮田 いや、え、ちょ……

鶴丸 なにか不満でもあるかね？

宮田 ……いえ。

貴子（宮田の手を取り）ありがとうございます。なんて言って感謝したらいいか、もう、抱きしめたい気持ちですわ。

宮田 お気持ちだけで……

貴子 討伐の中継だけじゃなくて、逆に帰順した蕃人に内地の様子を見せたりするのも面白いと思いますの。これからは活動写真の時代ですもの、内地には負けていられませんわ。

宮田 はい……

貴子 そうと決まったら、さっそく先方に、報告して来なくちゃ。

鶴丸 下の電話使ったらどうだ？

貴子 平松同仁社って、すぐそこですから。撮影技師さんがお手すきなようだったら、後でお連れしますわ。皆さんにも紹介しておきたいですし。

貴子、去る。

鶴丸、脱力して椅子に座る。

呆然とする宮田。

鶴丸 それで。

宮田 え？

鶴丸 先生を迎える準備は出来たのかね？

宮田 あ、いえ、ですから毛布が……

鶴丸 それでいいから、早くしたまえ。

宮田 はい……

宮田、毛布をソファに広げる。

宮田 あの、課長……

鶴丸 ちよつと、見て来るか。

宮田 え？

鶴丸 中島巡査が一緒なら大丈夫だと思うが、なにやら心配で。

宮田 百木さんって、蕃地調査のオーソリチーだと伺いましたけど。

鶴丸 あいつ、自分の興味のためなら、先生置いて来かねないからな。

宮田 じゃあ、私が。

鶴丸 いいから、おまえは撮影の勉強でもしている。

宮田 それなんですけど……

鶴丸 なにか問題あるか？

宮田 ……いえ、いつてらっしゃいませ。

鶴丸、去る。

宮田、ソファに座り、脱力する。

窓ガラスを叩く音。

宮田、驚いて窓の方を見る。

窓を開けて、外の様子を伺う。

宮田 ……

宮田、ハンカチで鼻を覆う。

そこに、アイ。

着物に白い割烹着姿で、やはり愛国婦人会のたすきを掛けている。

アイ すみません。

宮田 はい……

アイ 百木ですけど、鶴丸さんは……

宮田 ああ、百木さんの。

アイ 主人がお世話になっております。

宮田 測量技師の宮田です。

宮田、ハンカチで鼻を覆ったまま、お辞儀する。

アイ あの、臭いますか？ やっぱり。

宮田 ええ、ちよっと……

アイ 明け方まで、干物の袋詰め作業をしたものですから。すみません、着物も変えずに来てしまつて。

宮田 いやいやいや、外ですよ、臭いのは。

アイ え？ 外ですか？

宮田 しませんか？ なんていうか、生ものが腐ったような……

アイ ああ、この臭い。

宮田 たまらなくて、基隆（きーるん）についてからずっと。

アイ 確かに、独特ですよね。

宮田 ……すみません。私、神経質なんでしょうか。

アイ そんな、私が慣れてしまっただけですよ。私もこつちに来たばかりの頃は、始終鼻を覆つてましたもの。あの頃の臭いはこんなものじゃありませんでしたけど。人間、どんな環境でも三日もすれば慣れますのね。

宮田 そうですよね。うん、ちよっと慣れてきた気がする。

アイ そんな、すぐに。

二人、笑い合う。

宮田、窓を閉じる。

宮田 そうだ、御主人、良かったですね。

アイ え？ なにが……

宮田 無事に戻られて。

アイ 帰ってきたんですか？

宮田 ええ、さつき連絡がありました。

アイ 今どこに？

宮田 こつちに向かつてると思います。

アイ そうなんですか……

宮田 すみません、連絡受けていらしたのかと。

アイ いえ、私は鶴丸さんにお返しするものがあつて。

宮田 そうなんですか、課長は今、御主人を迎えにそこまで。

アイ すみません、いつも御迷惑をお掛けして。

宮田 私は赴任したばかりですから、まだ全然。

アイ じゃあ、これから御迷惑を……

宮田 迷惑だなんて、楽しみですよ。

アイ 皆さん、最初はそうおっしゃってくださいさるんですが。

宮田 なんだかんだ言っつて、皆、楽しんでるんじゃないですか？ 課長だつて、なにかつていうと、百木、百木つて。
アイ そうでしょうか。

短い沈黙。

宮田 なんでしたっけ、タケなんとかつて…:

アイ タケトルですか？ ブヌン族の。

宮田 そうそう、決闘したらしいじゃないですか、その蕃人と。

アイ 決闘だなんて、とんでもない。

宮田 決闘の末、感服したタケトルと友達になつたつて聞きましたよ。

アイ 友達なのは本当ですけど。なんていうか、ちょっと…:

宮田 違うんですか？

アイ 逃げたんですよ、タケトルから。

宮田 それは、どういう？

アイ もう随分前ですけど、タケトルの村の人が殺されてタケトルが怒りましてね、日本人の首を狩りに行こうとしているところに、主人の調査隊が出てわしてしまつたんです。それで、絶対首を取るつて、主人が居た村が包囲されて。それなのに、あの人つたら、その村の頭目がこのまま匿うつて言つてくれているにもかかわらず、「首が欲しければ、くれてやる」つて、正面から村を出て。それから五日間。

宮田 みごとに逃げ切つたと。

アイ みごと、かどうか。

宮田 すごいじゃないですか。

アイ でも逃げたんですよ。

宮田 蕃地の中なんて、普通に歩くだけでも大変だつていいですよ。それを蕃人に追われながら五日間なんて。

アイ (嬉しそうに) そうでしょうか。

宮田 感服もしますよ、そりゃ。

アイ 感服したかどうかはわかりませんが、その次の調査の時、タケトルの方から、主人の荷物を運ばせてほしいつて言つて来たとか。

宮田 すごいなあ、本当に。

アイ そういつていただけると。

宮田 日本人の頭目つて呼ばれてるだけありますね。

アイ (慌てて) え、なんですか、それ？

宮田 蕃人からそう呼ばれてるつて聞きましたよ。

アイ そんな、噂ですよ、話が大きくなつていゝるんですわ。

宮田 伝説ですよ、もはや。

アイ 主人はただの学者ですから。

宮田 そんなことないですつて。すごいよなあ。伝説として語り継がれるなんて、男の夢じゃないですか。

アイ あの……、主人はまだ……

宮田 遅いですね、もう着いてもいい頃なんです。

アイ 私、ちよつと見てきます。

宮田 ここでお待ちになった方が。課長も見に行ってますし。

アイ ええ、でも、ちよつと心配ですし。すみません、失礼いたします。

宮田 ああ、いえ。

アイ、廊下に行く。

宮田、テーブルの上の資料を片づけはじめ。

再び、窓を叩く音。

宮田、先ほどよりも慎重に窓に近づき、一気に窓を開ける。

外にはなにもなく、やはりひどい臭い。

鼻を覆いながら、宮田が窓を閉めようとしたところに、

百木が顔を出す。

その顔は黒く汚れている。

宮田 わ！

宮田、驚いて窓から離れ、ソファに身を隠す。

百木、窓から写真機を差し出す。

百木 おい。

宮田 え？ ええ？

百木 受け取れよ、入れないだろう。

宮田 ちよつと、あれ？ ここ二階ですよ。

百木 これくらい登れないようで、蕃地が歩けるか。早く。

宮田 は、はい。

宮田、写真機を受け取り、見る。

百木 写真機がそんなに珍しいか？

宮田 ……もしかして、百木さんですか？ 私、測量技師として昨日から……

百木 早く運べよ、荷物まだあるんだ。

宮田 はい。

宮田、写真機を机に運ぶ。

百木 何しに来たんだ、あいつ。

宮田 え？

百木 中島さんが連絡したか。余計なことを。

宮田 見てたんですか？ 奥様がいらしてるの。

百木 いいから、早く。

百木、袋をひとつ大切そうに窓から差し出して待っている。

宮田、袋を両手で受け取る。

百木 丁寧に扱えよ、大事な戦利品だ。

宮田 見てたんなら、声かけてくだされば。奥様迎えに行っちゃいましたよ。

百木 声かけるくらいなら、玄関から入ってる。

宮田 入ればいいと思いますけど……

百木、大きな荷物を窓から投げ入れ、自分も窓から入ってくる。

宮田、百木を避けようと、袋から片手を放す。

百木 丁寧に扱えって言ってるだろう。

宮田 (慌てて袋を両手で持ち直し、机に向かい) なんなんですか？ これ。

百木 髑髏だ。

宮田 ええ？

宮田、慌てて袋を机に置く。

百木 おい！

宮田 すみません！

百木 ツオウの村からやっとの思いで取ってきたんだぞ。見つかったら抗日蜂起だつてのに。

宮田 大丈夫なんですか？ それ。

百木 吊ってる間は、蕃人も怖がつてあんまり調べないから。見てみるか？

宮田 はい。

百木 (袋から髑髏を出し) どうだ、みごとだろう。

宮田 ……真っ黒ですね。

百木 この煤で汚れているのが特徴なんだ。ツオウ族は取った首を天井のところに吊しとくからな。これを計測すれば、ツオウの生活圏がわかる。

宮田 あれ、ちょっと待って下さい。先生はどうしたんですか？

百木 なんだよ、折角説明してるのに。

百木、髑髏を袋に戻し、鞆の中味を机に並べはじめ。

鞆の中味は、ガラス乾板の入った箱、地図、スケッチブックなど。

宮田 だって、一緒だったんですよ？ まさか……

百木 待つてられるか、ご老体の回復なんて。

宮田 やっぱり。どこに置いてきちゃったんですか？

百木 もうちよつと休んでいくって言ったの、先生の方だぞ。やわなんだよ、山降りてきただけで、ゼイゼイ言っつて。

宮田 タケトルから逃げ切った人に比べたら、そりゃ。

百木 知っているのか？ タケトルのこと。

宮田 蕃人ですよ。

百木 ブヌン族だ。蕃人の中で一番強い民族だ。普段は家族ごとに村を作つて暮らしてるんだが、いざつて時は、村同士が結束する。写真見るか？

宮田 あとで、是非。私、課長に報告してきますから。

百木 (宮田の手を引き) いいから、見ろつて。

宮田 ちよつと放して下さいよ。

百木 (散乱した資料の山から写真を引つ張り出し) ほら、これが、カンタバンの蕃のブヌン族。で、こいつが手に提げてるのは霧社蕃のタイヤル族の首。

宮田 うわ。どうなつてるんですか、これ？

百木 額のところ、こう切り込み入れて、紐を通すんだ。

宮田 すいかですね、まるで。

百木 ブヌンは単独で狩りに行くからな。これは、他の民族じゃありえない。

(写真の蕃人を指し) こいつも、一人で帰つてきたところで……

宮田 あの、本当に、報告してこないと。課長、外で待つてますし。

百木 (宮田の手を掴み) あつた、あつた、これがタケトルだ。

宮田 後で見ますから。

百木 あいつ、嫌がつてた割には、格好つけてるだろう。

宮田 (仕方なく見て) 小さいですね、意外と。

百木 肉体じゃない。あいつは、そう、気配なんだ。五日間、森の中を必死に走りながら、あいつの気配をずっと感じてたよ。わかるかな、俺の存在を感じ取るうとする気配なんだ。

宮田、百木に見入る。

そこに、鶴丸と中島に支えられた森尾が入ってくる。

百木、棚の影に隠れる。

鶴丸 先生、足下気を付けて下さい。

森尾 ああ。

鶴丸 ちよつと、手貸してくれ。

宮田、駆け寄って手を貸す。

宮田・中島 あ。

中島 どうも、昨日は。

鶴丸 なんだ、知り合いか。

宮田 台北駅でちよっと。

中島 総督府の方でしたか。

宮田 宮田です。あなただったんですね、中島さんって。

鶴丸、中島、宮田がソファに森尾を座らせる。

鶴丸 何か飲まれますか？

森尾 いや、いい。

鶴丸 誰か電報の手配してきてくれ。東京帝大に、先生はご無事ですって。

中島 じゃあ、私が。

中島去る。

森尾 宮田くんと言ったかな、百木くん見なかったかね？ 早く現像したいと

いうんで、先に行かせたんだが。

宮田 百木さんなら、(棚の裏を指し)そこに……

百木、ガラス乾板の箱を抱えて窓から出ようとしている。

百木 (宮田に) 告げ口するなよ。

宮田 すみません……

鶴丸 なにやってるんだ？ お前。

百木 現像しに行くんですよ。

鶴丸 いいから、こつちに来い。そんな、こそこそと窓から。

百木 行ったら、説教するでしょう？

鶴丸 馬鹿なこと言ってるんで、ちゃんと報告しろ。子供じゃないんだから。

百木、鶴丸の方へ近寄り、箱を机に置く。

鶴丸 一ヶ月も調査期間延ばして、なにやってた。

百木 リキリキ社でパイワン族の調査していたら、ボガリ社まで足を伸ばした
くなつて……

鶴丸 またか？ お前は どうして そうやって 予定を変える？ なんのための調
査計画書だ。

百木 やつぱり説教するんじゃないですか。

鶴丸 調査隊はお前一人じゃないんだぞ。さっさと一人で帰ってきて、先生になにかあつたらどうする？

百木 ちゃんと生きてるじゃないですか。

鶴丸 死にそうじゃないか。

森尾 生きてる、生きてる。

百木 別に山に置いてきたわけじゃないんだから。

鶴丸 山だったら、こんなもんじゃすません。

森尾 ああ、もう、いい、いいから。

百木 大体ね、蕃人研究するのに、山歩きに慣れてないって、学者としてどうなんですか。

鶴丸 先生に向かつてなんてこと言うんだ。

百木 だって、パイワン族の風俗をまとめるには、どうしても必要だったんですよ。リキリキ社だけじゃ、どうしても確証が得られなくて。

鶴丸 なんの？

百木 パイワン族が、ツアリセンやプユマと同種族だったことですよ。

鶴丸 お前、まだそんなこと言ってるのか？

百木 蕃人の分類は急務だって言ったの、課長じゃないですか。いつまでもシナ人が作った分類に頼ってるわけにいかないからって。

鶴丸 帰順して漢民族化してるかどうかって分類じゃ、どうにもならんからな。

百木 だから、こつちは一生懸命調査して。

鶴丸 いいか、蕃人は九種類に分類できると、既に先生が発表しておられる。

百木 それに納得がいかないって言うてるんです。あんなの住んでる地域で分けただけじゃないですか。

鶴丸 先生は蕃人研究の第一人者だぞ。その説が間違っているというのか？

百木 いいですか？ パイワンとツアリセンとプユマは、体質はもちろん、伝説、土俗、慣習、それに言語までほとんど一致してるんですよ。それがどうして、別の種族になるんです？

鶴丸 仮にそうだとしても、だ。蕃地の近代化を計画する上では、住んでいる地域ごとに分類されている方が……

百木 政府の都合なんか、知りませんよ。

鶴丸 なんだと！

森尾 まあまあ、（百木に）別に君の説が間違っていると言っているわけじゃない。私の説を批判したいなら、すればいいじゃないか。

百木 さすが、第一人者。余裕ですね。

森尾 そう突っかかるな。

鶴丸 もう既に先生の分類法で、蕃地の経営方針は進んでるんです。終わったことに割く経費はありませんよ。

森尾 経営方針が決まっても、研究が終った訳じゃないからな。

鶴丸 しかし……

森尾 彼の写真、みたかね？ 私は今回始めて見たが、蕃人がなんの警戒もしないで、そのままの生活をさらけ出している。あれは、台湾の歴史に残る一次資料になるよ。総督府にとっても、財産になるものだと思うがね。

鶴丸 ……

森尾 あの写真、「蕃族図譜」としてまとめたまえよ、楽しみにしているから。百木 ありがとうございます。（ガラス乾板を持ち）じゃ、そういうわけで。

鶴丸 ちよつと待て。

百木 なんなんですか。

鶴丸 ともなく、まずは調査の報告をしる。

百木 したじやないですか、だから。

鶴丸 まだ、遅くなつた理由しか聞いておらん。

百木 ……早く見たいんですよ、出来上つた写真を。

森尾 あれはどうした？ ツオウの。

百木 ああ。（宮田に）おい。

宮田 え？

百木 （髑髏の入つた袋を指し）それ、お見せして。

宮田 あ、はい。

百木 丁寧にな。

宮田、袋から髑髏を出す。

鶴丸 こりやすごい。さすが先生。

森尾 百木くんだよ。私には真似できん。

百木 それ、後で計測するから、準備しておいて。

宮田 はい。

鶴丸 あ、彼はしばらく手伝えないんだ。別の仕事をしてもらうんで。

宮田 その件なんですか……

百木 なんなんですか、別の仕事って。

鶴丸 活動写真の助手をしてもらう。

百木 買ったんですか？ そりゃ、すごい。いつか調査に取り入れたいと思つてたんですよ。

鶴丸 ……ああ、そうだろう。

百木 西洋の人類学研究には、既に使われ始めてますからね。

森尾 なんでも西洋の真似をするのはどうかと思うがね。

百木 技術は技術であつて、研究の本筋とは関係ありませんよ。勝負すべきは、研究の中味じゃないですか。

宮田 いや、あの、そうではなくて……

そこに、中島が戻ってくる。

鶴丸 随分かかりましたね。

中島 大広間の扉の建付けが悪いつていうんで、ついで見えてきたんですよ。なに、ちよつと削つてやれば良くなります。後でカナナ持ってきますよ。

鶴丸 すみません。いつも助かります。

中島 昔取つた杵柄ですから。お役に立って何よりですよ。（扉の方を見て）……あれ、入つてこないなあ。

鶴丸 なにか？

中島 あの子が来てたんですよ。百木さんとこの娘さん。

百木 ハナコですか。

中島 ええ、夏夫くん連れて。上がってくるように言つたんですが……

中島、廊下へ出る。

百木 （髑髏を指し）それ、仕舞え。

宮田 え？

森尾 ああ、そうだな。

鶴丸 あの子は、タイヤル族だったか？

宮田 え、でも娘さんつて。

鶴丸 養女だよ。変わつてるだろう？ 奥さんも苦労するよ。

百木 蕃人の言葉を学ばなきゃ、調査にならないんですよ。

森尾 いずれにしても、蕃人には見せないほうがいい。

百木 いや、むしろ夏夫ですよ、問題は。絶対興味持ちますから。

宮田 父親ゆずりの学者肌ですか。

百木 そういうんじゃない、ちよつと頭が足りないんだ、あいつは。ちよつと珍しい物見ると、なんでも神様、神様つて。

中島、入ってくる。

宮田、慌てて髑髏を袋にしまう。

中島に続いて、ハナコと夏夫。

中島 ほら、お入りなさい。

ハナコ マホワイ・ス。

中島 え？

百木 ありがとうつて。

中島 ああ、いやいや。

ハナコ お父様。

夏夫 お父さん！ どこ行つてたの？

夏夫、百木に駆け寄る。

百木 (ガラス乾板を庇い) 危ない。寄るな。

夏夫 ごめんなさい。

宮田 そんな言い方しなくても…… (夏夫に触れ) あれ、雨？

ハナコ 降ってきました。

宮田 (手ぬぐいを夏夫に差し出し) これ使って。

ハナコ マホワイ・ス。

ハナコ、夏夫の代りに手ぬぐいを受け取り、夏夫を拭く。

ハナコ お母様いませんか？

宮田 そういえば、戻ってきませんね。ちょっと見てくるって言ったつきり。

鶴丸 会わなかったぞ。

宮田 私、見てきましようか。

百木 大丈夫だよ、子供じゃないんだから。

宮田 でも……

中島 私が見てきましょう。大分、治安も良くなったとはいえ、心配ですから。

宮田 すみません、お願いします。

中島、去る。

百木 (宮田に、髑髏の袋を指して) それ、持ってきてくれ。

宮田 はい。

百木と宮田、棚にガラス乾板と髑髏の袋を置きに行く。

それをじっと見つめる夏夫。

ハナコ (鶴丸に封筒を差し出し) これ、お母様が忘れて。

鶴丸 ああ、今日、返済日だったな。(と、お札を出して数える。) あれ？ こ

れしか入っていなかったか？

ハナコ はい。

鶴丸 おかしいな。

森尾 どうかしたかね。

鶴丸 足りないんです。二十円しかない。

鶴丸、森尾、ハナコを見る。

ハナコ 私、知りません。

鶴丸 本当に？

森尾 どこかに落としたりしなかったか？

ハナコ 知りません。

百木と宮田が戻ってくる。

夏夫、棚に近づき、手を伸ばす。

百木 いいんですよ、二十円で。

鶴丸 なに言ってるんだ。

百木 アイには、二十円しか渡してませんから。

鶴丸 しかし、俺が貸したのは三十円で……

百木 ガラス乾板を買ったんで。

鶴丸 どういうことだ？

百木 補充したんですよ、切らしてたので。

鶴丸 あのなあ、お前が生活出来ないっていうから貸したんだぞ。

百木 生活できないくらい大変とは言いましたが、生活費に使うとは言ってませんよ。

鶴丸 じゃあ、残りの十円はどうなるんだ？

百木 さあ。

鶴丸 ふざけるな。

夏夫、棚に乗った髑髏の袋を引っ張る。

袋が落ちて、髑髏が音を立てて転がる。

その場に緊張が走る。

ハナコ これ、ツオウの……

百木 いや、これは……

慌てて髑髏を拾おうとする鶴丸、宮田、森尾。

それより早く、夏夫がひとつ髑髏を拾いあげる。

夏夫 きれいだ。

百木 返しなさい。

夏夫 これなに？

森尾 山で行き倒れになった人の骨だよ。

夏夫 違うよ。黒くてピカピカだもん。神様だよ。

森尾 夏夫くん、それ返してくれるかな。

夏夫 これ、僕ほしい！

百木 駄目だ。

夏夫 なんて？

百木 なんでもだ。

夏夫 ぼくんだ。

百木 我が儘言うな。(髑髏を力づくで奪おうとし) 放しなさい！

夏夫 いやだー！ー！ ぼくんだー！ー！

そこに、中島とアイ。

アイ 夏夫。

夏夫 お母さん！

アイ ハナコ、なんでいるの？

百木、夏夫がアイに気を取られた隙に、髑髏を奪い取る。

夏夫 ぼくんだ。それ、ぼくんだ。

アイ 夏夫！ (夏夫を抱きしめ) 大丈夫、大丈夫だから。

夏夫 お父さんが、お父さんが取った。

百木 子供のおもちじゃない。

アイ あなた。(夏夫に) 大丈夫、大丈夫。

夏夫、しゃくりあげているが、段々落ち着いてくる。

夏夫 あれ、僕の神様なのに。お父さんが。

アイ あれはね、お父さんの神様なのよ。

夏夫 うん。

アイ 夏夫が持つてると、お父さんが困るのよ。

夏夫 うん。

アイ やあね、こんなに服濡らして。

夏夫 お母さんも濡れてる。

アイ 傘持つてなかったの？ 濡れたままじゃ風邪引いちゃうわ。

アイ、自分のハンカチで夏夫を拭く。

アイ 家に居なさいって、言ったのに……

ハナコ 忘れ物、大切と思って。

アイ え？ (懐を探り) いやだ、私ったら。

ハナコ 気がついたら、もうお母様いなくて……

アイ すみません。私が忘れ物なんかしたばかりに、御迷惑お掛けして。

鶴丸 いやいや、気になさらないでください。
アイ 本当に私のせいだ。

その時、外から討伐隊の歌う「桃太郎」の歌が聞えてくる。

続く